

■令和6年度第2回和歌山県スポーツ推進審議会 議事録<概要版>

日 時：令和7年3月24日（月）13：30～15：00

場 所：和歌山県自治会館 会議室203

◆出席者：村瀬 浩二 会長（学識経験者）

生駒 享（県スポーツ振興財団常務理事）

梅田 千景（県スポーツ協会副会長）

岡 桂子（学識経験者）

川口 勝也（県高等学校体育連盟会長）

川畑 豪則（県小学校体育連絡協議会会長）

阪本 憲二（障害者スポーツ代表）

島本 久仁（スポーツ選手・指導者代表）

成瀬 裕之（県PTA連合会副会長）

坂東 あつみ（女性スポーツ代表）

南 由佳（学識経験者）

◆事務局：

北村 企画政策局長

スポーツ課 田伏 スポーツ課長

坂口 副課長

中嶋 副課長兼総務管理班長

高橋 スポーツ企画班長

山本 競技力向上推進班長

玉井 生涯スポーツ班長

教育支援課 窪田 教育支援課長

山田充洋 指導主事

森下 指導主事

義務教育課 武田 指導主事

◆議事

1 開会

委員19名のうち11名で過半数出席。

よって和歌山県スポーツ推進審議会条例第4条の規定により、本会議が成立。

2 企画政策局長挨拶

本日はスポーツ関係団体への補助及び生涯スポーツ振興や競技力向上に係る来年度予算につきましてご審議をいただく。

スポーツ課が教育委員会から知事部局に移管し、障害者スポーツを含むスポーツ全般を

所管する組織として1年が経過しさらに、4月には、関西広域で開催される「ワールドマスターズゲームズ 2027 関西」の本格的な競技運営の準備などのため、スポーツ課内に「ワールドマスターズゲームズ推進室」を新たに設置することになりましたことをご報告させていただきます。

当審議会が本県のさらなるスポーツ振興に繋がる有意義な会議となるよう、皆様から忌憚のないご意見をお願いします。

3 議題

議題（1）「令和7年度におけるスポーツ団体に対する補助（案）」

資料1により、事務局（中嶋 副課長兼総務管理班長）が説明。

【質疑応答等】

（村瀬会長）

ジュニアハイスクール指定が廃止されているが、この経緯を説明いただきたい。

（山本 競技力向上推進班長）

中学生の運動部活動に対しての支援で今年度は660万円補助していたが、地域連携を受けて、クラブチームが参入しているという経緯もあり、また、毎年強いチームが変わっていることもあり、一番全体を把握している競技団体に対しての補助という形で、ジュニアの強化をしてもらうこととなり、廃止の方向になった。

（村瀬会長）

その分の予算が、他に回ったということか。

（山本 競技力向上推進班長）

競技団体に対する補助金であるトップアスリート育成事業でジュニアカテゴリーに入った。

議事（2）令和7年度における本県スポーツ振興の取組について

資料2-1「令和7年度における本県スポーツ振興の取組」における「令和7年度和歌山県生涯スポーツ振興基本方針（案）」

資料2-1により、事務局（玉井 生涯スポーツ班長、高橋 スポーツ企画班長）が説明。

【質疑応答等】

（生駒委員）

6年度と比較して、今回の基本方針での変更や特徴があれば説明してほしい。

（玉井 生涯スポーツ班長）

スポーツ課の方に障害者スポーツも一元化されたということで、障害者スポーツの振興

についてを追記している。

(田伏 スポーツ課長)

補足だが、スポーツキャンプの誘致も予算をかなり増やしている。

ねらいとしては、世界陸上が東京で開催され、デフリンピックも東京で開催される。

それから、アジアパラ競技大会もあるので、トップアスリートの事前合宿の誘致に力を入れていきたいと考えている。

(村瀬会長)

この目的の部分だが、スポーツ全体、生涯スポーツ全体を統括するような形になっていると思うが、そうすると県民の“健康”に対してという文言が入った方が良いのでは。

県民のウェルビーイングまで広げると大変かもしれないが、“健康”に対して、何かしら寄与をするといった文言があった方がいいのではないか。

一部のスポーツ実践だけではなく、全県民の“健康”に繋がっているのだということはきちんと示した方がいいのでは。

検討ください。

議事(2) 令和7年度における本県スポーツ振興の取組について

資料2-2「令和7年度和歌山県競技力向上対策基本方針(案)」

資料2-2により、事務局(山本 競技力向上推進班長)が説明。

【質疑応答等】

(村瀬会長)

国民体育大会から名前が変わり国民スポーツ大会となった初回で47位だったが、そこから強化体制、問題を変えていこうという取り組みが伺える。

私も関わったこともあり、このあたりで少し伺いたいところが、今までゴールデンキッズで育成してたと思うが、それを切り替えてやっ Cha る!!に変えた。

今回出席の委員はあまりご存知ないかと思うので、この経緯を説明してほしい。

(山本 競技力向上推進班長)

ゴールデンキッズ発掘プロジェクトは、18年間継続してきた。

小学校3年生を対象に体力測定を行い、運動神経の優れた30名を選考し、小学4～6年生で育成プログラムを実施し各競技に繋げていき、全国大会や世界大会オリンピックに出場をするような選手を育てるというような事業であった。

しかし、こどもの数が少ない、国スポ実施競技団体の中にジュニアが枯渇している団体が多数あり、30人選択ではなく、小～中学生で今まで出会うことのない競技を体験し、直接競技団体にパスウェイをするという事業を展開し、こどもたちに競技スポーツに親しんでもらうというような事業に転換した。

育成するのは競技団体におまかせするという形である。

(村瀬会長)

本日いる競技団体の方々のところはほとんど関わりがないのかと。

もしそういう形でこういう選手を集めたいという団体が参加していただけるようでしたら、手を挙げていただけるとありがたい。

マッチングも成功してるということだが、実績はどれぐらいあったのか。

(山本 競技力向上推進班長)

昨年の12月に競技体験のトライアルという事業をし、その後競技団体に評価をしてもらい、評価を受けたこどもたちが今年に入り、各9競技のもう少し専門的な競技体験で各競技の練習会に参加した。

100名ぐらいのこどもたちがそこに参加し、今年4月以降に、また改めてその練習会に参加していくという形になるが、現状今何人が繋がったかは、数字的にはまだわからない。

人数については、追ってまたご報告する。

議事(3)「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」における運動・スポーツに対する愛好度について

資料3により、事務局(高橋 スポーツ企画班長)が説明。

【質疑応答等】

(村瀬会長)

昨年度の私のこの審議会での発言だった。

これまで結構重視されたのが体力テストの数値だった。

スポーツ愛好度、要は、体育の授業が好きだとか運動が好きだ、スポーツが好きだというのが、先々のスポーツ実施率に繋がる。

体力テストの数値は、作れば上がるということを昨年述べた。

あまりそこで一喜一憂してもそれほど意味がない。

一番に目指すべきは愛好度の数字である。

愛好度がそのまま、生涯のスポーツ実施率に繋がっていくのは、学校体育の重要さが見えるが、委員の皆さんから、このスポーツ愛好度を高める手立てで何かご意見いただければ。

(島本委員)

これからの方向性で、体育・保健体育科の授業改善に向けた取り組みを行うと書かれているが、具体的に何か方向性っていうのを示してほしい。

(教育支援課 山田指導主事)

体育科授業、体育保健科授業の改善で、毎年、国で研修を受けた先生方を中心に、和歌山県に帰ってきたら、県内の先生方に国で教わったことを周知していくといったような研

修会を開催している。

なお、モデル校を指定し、授業改善に向けた取り組みを長期にわたって考え、事業研究会で、広く県内の先生方に見てもらおう機会を設けている。

また、そういった取り組みの事例集たるものを県のホームページに公開し、県内の先生方に実践してほしいと取り組んでいる。

(島本委員)

中学校の部活動が廃止の方向ではなく、地域移行の方向に今なっているが、その中でやはり学校体育が一番大事。

地域移行をしていくのはいいことなのかはまだ不明だが、その過程で、子どもたちがいろんなスポーツに接することが少なくなっている。

競技の種類っていろいろをいっぱい受けたり、感じられるように、体育授業もそうあってほしい。

(教育支援課 山田指導主事)

保健体育の授業充実に向けて研修会を熱心に取り組んでいきたいと考えており、先生方にもぜひ、子どもたちが体育って楽しいと思えるような授業改善を目指して進めていけたら。

(南委員)

これからの方向性で、昨年、一昨年も同じように質問したが、子どもから大人まで幅広い世代を問わず楽しめる機会を創出するため、誰もが気軽に参加できるスポーツイベント等を開催するというのは、県で開催すると思うが、例えばパンダRUNをやるため、県内にある各総合型地域スポーツクラブで練習会をするというような、関連のある事業をしていただけると、総合型地域スポーツクラブとして、目標ができる。

あと、スポーツマッチングプロジェクトにしても、多分県の職員や、競技団体だけで事業を行うと、やはり上手く物事は回らなくなる。

週1回や、せめて月1回でも、機会創出でもっと総合型地域スポーツクラブを活用してもらえば、身近に誰でも楽しめることができるのではないかと。

なぜそのように考えるかという、私の所属するクラブで学校には登校していない子ども、総合型地域スポーツクラブに通っている子がたくさんいる。

学校では、人間関係の事情があって通えない、体育の授業が嫌いだったり、そういう子どもたちが、スポーツというよりも遊びに来ている感覚。

学校に行かず、高校は通信に行くか行かないかと言ってた子が、全日制の学校に登校できるようになり、運動好きになるきっかけが、学校以外にもできるんじゃないかと。

競技団体や県だけが橋渡しじゃなく、もう少し何か関連していくと、みんな楽に、システムの的にできると思い意見した。

(川口委員)

先ほどから、学校の授業で体育の話も出てきているが昨年、22年ぶりに現場に戻り、いろいろ最新の授業の学習指導要領確認し、昔は、水泳や器械運動の鉄棒であったり、必修で高校でも授業があったが、広く学習指導要領が改訂され、個人の選択であったり学校選択で、選択しなければ水泳とか鉄棒をやらなくてもいいと、こどもたちに寄り添い、あまり運動嫌いにならないようなそういった形に変えられている。

授業改善のお話も出たが、シフトをしてるのかな。

あと、違う観点だが、成人の週1回以上スポーツを実施率は、岩手県と和歌山県でかなり差がある。

そもそもこれは、調査の内容や調査のやり方っていうのは国と同じか、和歌山県独自・岩手独自のものを比べているのかどちらか。

例えば、お喋りしながらウォーキングも、ある意味スポーツだと思うが、スポーツと聞くと、競技スポーツ的なことをやらないとスポーツをやりますと回答していない場合もあるので。

(高橋 スポーツ企画班長)

自治体によってやり方が違う。

(村瀬会長)

その数字に関しては多少の誤差があるかとは思いますが、やはりこの愛好度は結構重要かと。

今、川口委員からお話もあったが、学校体育の方も変わってきているというのが重要なところ。

県スポーツ課のスポーツ振興基本方針でも、障害者スポーツも一緒になり、学校体育でもインクルーシブというのはかなり進められている。

学校体育の授業の中に、障害のある子が一緒に授業を受けているのが普通の姿になってきている。

こどもたちの意識、どんな人とでも一緒にスポーツを楽しもうとしてるっていうのが今の一番大きな方向性です。

トップアスリートを体育の授業で育てようというのはほぼ捨てている。

そこから変わっているのが現状かと。

(川畑委員)

運動好きな児童生徒を育成するというのは本当に大事だが、愛好度の経緯を見たとき、コロナ禍に入ってぐっと落ちたのは運動の機会がなくなってしまったからだと分かる。

令和4年度から小学校の男子と中学校の男子は、回復傾向だが、中学校の女子は、令和3年度に落ちてから横ばいのような形だ。

この原因は分析をしているのか。

中学校の男女間で開きがあり、何か今後の取り組みは考えているのか。

(教育支援課 山田指導主事)

スポーツの愛好度は、中学2年生の女子で、好き・やや好きと回答した生徒の割合が、平成30年度は約80%で、令和2年度が82%、令和3年度で下がって76%、令和4年度に78%、令和5年度76%、令和6年度77%、そこから横ばいで、なかなか愛好度が回復していないのが現状。

運動する機会が減ると、保健体育科以外の場所でも運動する機会が減り、愛好度がちょっと下がったと見ているが、教育としてできることは、村瀬委員おっしゃった共生の体育で、誰でも体育を楽しめ、器械運動が苦手だなどと思うと中学校の女子も体育に取り組めるよう授業改善をしていけたら。

また男女教習で、ともに学び合うというところを大切にし、仲間と学び合うということも、愛好度を図る上でも大事なところの一つかなと、そちらも進めていければ。

(村瀬会長)

このコロナ禍のリカバリーがなかなか進まないが、そんな簡単なことではない。

マスクをつけて体育をしていた経験が取れないから。

その頃、体育をしていた子たちは、その嫌な思いがずっとあるかと思うので、どうリカバリーするかがまだまだ課題かと。

それと実際、運動能力が落ちている。

去年、弾んだボールに手が当たらないっていう子を見かけた。

小学校3年生ぐらいで、普通なら必ず当たるが当たらないっていう子が結構いたが、やればすぐ当たるようになる。

ということは、経験がないことを意味する。

対人的なスポーツを全くやってなかったというのが、まだリカバリーできてない一つの事例です。

(梅田委員)

こどもが小学校を卒業し、孫もいないので、体育の授業っていうのがどうなっているのかは不明だが、ダンスが必修になったり、リレーで優劣をつけないようにしたり、昔だったら小学校6年生の組み体操が、有終の美を飾るみたいな感じだったが、こどもたちがやっぱり怪我が多いのでしなくなったとか、何かこどもたちから楽しみを奪っていているような気もするが、今の授業はどうなっているのか。

(教育支援課 山田指導主事)

組み体操はで体育科授業というより、特別活動といったところに入ってくるかと思うが、全体的な行事で、組み体操の内容練習とかを体育の授業の体づくり運動領域等で扱ったりすることがある。

気をつけていることは、一昔前に流行ったようなピラミッドで高い塔を作り、見栄えを良くし、小学校最後の6年生の組体操で拍手喝采というようなイメージを持たれている方も多いかと思うが、そうするとやはり危険度が上がる。

事故防止の安心安全な授業運営をしていかなければいけない。

2段組、3段組にしても、教員が補助できるような形で実施するというように現場には

お願いしているところで、組み体操をやってはいけないというわけではない。

先ほど言われた表現ダンスだが、中学校の必修化になっており、小学校においては表現運動というところで1～6年生まで、全て表現の授業をするような形になっている。

リズム運動や、表現そのものの運動とか、フォークダンスなど内容がいろいろ分かれてはいるが、そういった形で授業展開しているような形になっている。

(村瀬会長)

表現に関して補足すると、だいぶ時代が変わってきた感がある。

我々の頃は、ダンスは男子がやるもんじゃないと思っていたが今は、誰でも受けられるようになり、自分なりの表現ができる機会にもなるので、これを体育でやれるのは非常に意味がある。

得意な子だけではなく、誰もが参加できるというのを、どの種目にしても目指してるといのが今の方向性。

4 報告事項

報告事項(1)「令和6年度における本県のスポーツの成果と課題について」

資料4により、事務局(高橋 スポーツ企画班長)が説明。

【質疑応答等】

(阪本委員)

中学生のクラブ活動がなくなり、民間なりのところで強化するとなっているが、それで強化できるのか。

中学生のときが一番強化しなくてはならないと。

学校の先生方の働き方改革の話の際にも話しをさせてもらったが、いろんなことがあるが、学校と地域のクラブと一体になり、中学生の体育向上をやらないといけない気がする。

どこの学校にどのクラブがあるか生徒たちもあんまりわかってないような気もするが、学校なり、地域ぐるみ、地域範囲でどういうクラブがあるかっていうのは何か把握されているのか。

(坂口副課長)

クラブの地域連携・地域移行については、いろんな問題、課題、良いところもあるかと。

市町村によっては、教育委員会独自でクラブチームというか、総合型スポーツクラブにお願いして指導していただいているというところはもちろん、学校の部活動と市町村との関わりっていうのはすごく深い関係にある。

ただ、クラブチーム単独だと、その存在を分かっている子だけがそのチームに行ってしまうということもある。

実は、今回中学校の部活で国費を使ってやっている事業は、教育委員会にやってもらっているが、中でも、市町村の教育委員会が国費を申請して決定していくことは、中学校と

クラブチームとが連携していくことが一番の課題で、それを理解した上で進めていかなければならない。

今後のスポーツを所管する県スポーツ課と、学校を所管する教育委員会っていうのは切れない関係にある。

その中で、教育委員会と首長部局とが連携してやっていかなければならないなど。

先ほど阪本委員がおっしゃっていただいたところをきちっと、県としても連携を図っていく。

(村瀬会長)

学校と地域における子供のスポーツ環境の充実 子供を取り巻く社会のスポーツ環境の充実で、イベント等はしているが、一方でこどもたちが日常的（週1、2回とか）に通う活動できる場作りというのが大事だと思うが、今それが、どの程度確保されているか。

確保しようとする努力があるのかを教えてください。

(坂口副課長)

中学校でということか。

(村瀬会長)

子どもを取り巻く社会のスポーツ環境に対して。

(坂口副課長)

低年齢層であったりとか、小学校だったりとか、幼児教育から始まる部分に関してはそこまで把握しかねる部分がある。

県という言い方ではちょっと逃げ口上かもしれないが、市町村教育委員会でももう少し連携図った上で、市町村主体でできるような形を、いかに持っていくかを、先に整理していないといけないと思っている。

(村瀬会長)

そのレベルでの活動が一番先々のスポーツ参加とか、自分で健康を育てるとかということに繋がっていくと思うので、やっぱりそのレベルは何らかの形で準備する必要があるかな。

(南委員)

ライフステージに応じたスポーツ活動の推進 総合型地域スポーツクラブの育成・支援の中で、この3月に、和歌山市の総合型地域スポーツクラブ全部のQRコードが載ったチラシを、和歌山市の小学生低学年とか幼稚園の子に案内をした。

低年齢の子たちにも楽しんでもらえる環境として、南の方なら南で、和歌山市なら和歌山市でと分かれているなかで、和歌山市としての取り組みがあり、上富田の方では幼児だけ集まった取り組みがあるがそれが、県の事業と紐づけになっていないっていう状況であり、ここにいる委員でも知らないことがある。

普段から、幼児とか低年齢層の指導に出るが、そのことが（報告資料に）上がってこないのが、活動報告の指標を見ていて残念だと思う。

意見として申し上げた。

（村瀬会長）

私も若干関わっている和太クラブというのがあるが、つい最近、市から連絡先の照会という知らせが来ていた。

初めてやっと繋がりを理解ができた。

（南委員）

市内に総合型地域スポーツクラブはあるが、子どもたちはどこに連絡をしていいのかわからないという状況。

県の費用でチラシを作ったが、和歌山市は各学校に手配りで持っていかないと配れない。

坂東委員も私も、小学校に配りに行ったが、県から来る事業は一斉配布してるような気がするが、こちらのチラシ配布は、去年から急に言われてきて配れないということで困っているの、何か解決策を。

（村瀬会長）

そのあたりが明らかになっただけでもいいことだ。

（坂東委員）

さきほどの南委員の内容に関連して。

各小学校にチラシ配りに行ったが、学校の先生方が総合型地域スポーツクラブを知らないため、チラシ配布前に一度、学校に電話をして、総合型地域スポーツクラブこととかの説明と、そこからの話になるのでできれば、そのチラシ作っていただけるのはありがたいが、もう少し市や県の方から、「総合型スポーツクラブとはどういうもので、どういうふうな活動をしていて、教育委員会とかと皆連携していますよ」っていうお話をさせていただけると、「イベントがあって、チラシをお配りしていただきたい」っていうお話も一気に進む。

総合型地域スポーツクラブだとかがいっぱい報告資料には出てくるのですが、認知されてない学校の先生方が多いので、そこも含めて皆さんにお知らせいただくと進みやすいかなと思うのですが、その辺よろしくお願ひしたい。

（成瀬委員）

私は雑賀小学校でPTA会長をしている。

小学校において、和歌山市の生涯学習課がたぶんしてくれている子どもセンターという事業がある。

これは、教室みたいなものだがそこで、雑賀小学校では年間7、8回開催しているが、サッカー教室や野球教室、今年から護身術とかそういった教室があり、個々相互に子ども

たちが日常の中で色々なスポーツに触れられる機会だ。

しかし、全然子どもセンターを活用できていない小学校もある。

理由は、開催してくれるところが分からない、どこに頼んだらやってくれるか分からない。

それこそ、この総合型地域スポーツクラブの役割ではないのかなと感じているが。

結果、雑賀小学校の子どもセンターの教室に参加した子が、地元の野球クラブに入ったり、バスケットボールをするようになったりとかしているので、和歌山市の生涯学習課でしているこの事業だが、和歌山県がこことうまく連携して対応してもらえないのか。

(坂口副課長)

本来スポーツ課は、スポーツ全般を所管するということもあり、和歌山市は、市長部局にスポーツ振興課があるが、こどもたちのスポーツの部分は、少年団も含めて和歌山市教育委員会生涯学習課で所管しており、取り組みやすい市町村なのかと思う。

そこも含め県がやるべきことは、こどもたちがスポーツにふれあうきっかけを教育委員会や、スポーツ課から教育委員会にお願いすることもできるし、いろんな形で周知理解を進めていくっていうことができるので、そこは今私達も抜けているところではある。

今後、教育委員会・スポーツ課と分け隔てのないような形で連携をとっていきたい。

報告事項（２）「和歌山県民のスポーツ生活に関するアンケートの結果報告について」

資料５により、事務局（玉井 生涯スポーツ班長）が説明。

【質疑応答等】

(村瀬会長)

週３日以上の実施率がかなり低い、国と比較してかなり低いということだが、原因は何か分析しているのか。

(玉井 生涯スポーツ班長)

仕事とかがあり、なかなかスポーツに携わる時間がないということも結構あるのかと思う。

(村瀬会長)

それは全国的にもそうだろうから、何らかの原因で和歌山が急激に落ちた。

この令和３年から急激に落ちたままになっており、この状況を何とかしなきゃいけないと思う。

これはかなり、いろんな健康面にかかなり悪影響があると思える数字の低下だと。

分析を進めた方がいいのでは。

報告事項（３）「令和６年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果等について」

資料６により、事務局（窪田 教育支援課長）が説明。

【質疑応答等】

(坂東委員)

運動能力とかおっしゃるのは分かるが、最近のこどもたちって、スキップができない、後ろ向きに歩けないとか、自身の体を全て使えない子がたくさんいる。

何かの競技に特化して、と言っても、肩が上がらない、前屈ができない、膝がうまいこと曲がらない、足首が硬いとかいろいろあり、安全性を考え、いろんな競技種目を減らしているが、安全すぎてこどもたちが自分の体を防御できないことが多々ある。

安全は分かるが、自分の体を自分で守れるような形の運動っていうのを何か考えてほしい。

(教育支援課 山田指導主事)

小学校体育でいうと体づくり運動という領域がある。

相当前の改定で新たに入ってきた内容だが、先ほど坂東委員がおっしゃった、自分の体の動かし方自体をよくわかっていない、公園でよく親と遊ぶような経験をする時間もないというこどもたちが増えてきたということもあり、体をうまく動かすようなところから学んでいこうという領域。

私達もすごく大切だと考えているが、そこを学校体育で実践してもらうことで、全校種で小中高ともに体づくり運動療法は実施していくことになっており、まずは、低学年のこどもたちは、体の動かし方という面で実践している。

安全性と繋がるかどうか不明だが、田辺市でモデル校実践をし、全柔連の方に外部指導者として来てもらい、安全な転び方という形で体の使い方、転んだときに頭を打たないようにするためにどうしたらいいのかといったようなところとか、体づくり運動等でやっている。

こどもたちがどのように体を動かしていけるか、どうすればボールを投げる、ジャンプをするなどに繋げていけたらと考えている。

お答えになるか不明だが。

(村瀬会長)

授業の中でやっているが、こどもたちが本来遊びの中で身に着けてるはずの動きがない。

授業で補おうとしているが、足りていないというのも実際のところ。

体づくり運動をなかなかご理解いただけてない先生方も現場にいるかもしれない。

だがこれは、かなり重要なこと。

本来であれば、遊びの時間、日常生活の中での運動時間で身につけているはずのことがかなり抜けている。

しかも、コロナ禍で外で遊べなかった時間が、その経験をなくしてしまったということが実際のところだ。

どうリカバリーしていくかはかなり大きな課題ではないのか。

(川口委員)

自分が勤めている学校のPRになるが、つい先日、和歌山北高等学校西校舎にスポーツ健康科学科という県内唯一の体育科で、地域の小学校を訪問し、高校生が小学生に走り方を教えるというような授業をさせてもらった。

しょっちゅうは行けないので、今年は八幡台小学校しか行けていない。

走り方もそうだが、動かし方っていうのを、高校生側も教えるってというのが一つの勉強にもなり、非常に小学校の方にも好評だった。

今年度は小学校だったが、その前の年は幼稚園等にも行かせてもらった。

喜んでもらえるし、高校側も教える勉強にもなるので、そういった取り組みもしている。

(村瀬会長)

その点では私も養成側の人間として、小学校の免許取る生徒たちには先ほどの体つくりの話をもっと話しているがなにも、時間が短くてそれで十分かとは、なかなか体育科のように、全員には伝えきれていない。

ただ、かなり重要。

やはり授業作りの問題かなと思うので、力を入れてやっている学校は、そういう体育で身につけられるとは思う。

(南委員)

今のお話に関連して。

自分にも小学生の子がいるので感じているが、体育授業だけじゃ足りないと感じる。

インプットの経験よりもアウトプットの経験がなさすぎ。

高校生もそうだと思うが。

例えば道徳の授業で、保護者がサインをするとともに、授業をした保護者がどのように感じたかを書いてくださいみたいなものがあるが、体育の授業も宿題があつていいんじゃないかなって思っている。

やっぱり親の目ってすごい小学校低学年層ってすごく重要になってくると思う。

負担になるような量ではなくて、ちょっとやったらやったよとかでよい。

体育以外にも活動量が増えて(良いのではと思う)。

高校生の部活動をトレーナーとして見ていると思うが、今の高校2年生の年代は完全にコロナ禍第1世代で、量や経験値が足りていないし、新たにしないといけないトレーニングが増えてきているっていうのを逆算すると、もっと量を増やさないと無理だなんていうことを考え、自分の子どもたちには量を確保するために毎日のように総合型地域スポーツクラブに連れて行っている種目を体験させている。

うちはそういう環境だが、そうじゃない子どもはある程度、強制というのか、宿題として体育とか運動をするとか、体つくりをするっていうことが、比較的チェックをするので。

年度当初に、しゃがめるか、体の身体チェックとか、楽しめるっていうような宿題があつても、何か一つの改善案じゃないかなと思って意見させていただいた。

(村瀬会長)

今ちょっと出てきたのだが、子どもロコモの件は、ちょっと前に言われたと思うのだが、和歌山県ってデータは取れているのか。

この子どもロコモっていうと例えば、肩がここに後ろに上がるとか（※腕を上げて肩より後ろに上がるか）、しゃがんだときに足首のかかどがつけられるかとか、そういうデータがあるのか。

(教育支援課 山田指導主事)

私達の体育のところでは扱っていない。

もしかしたら、市町村で扱っている調査なのかもしれないが、私達では把握していない。

(村瀬会長)

市町村で取っていたりするところもあったりして、ちょっと全て把握できていないんですね。

確か、かつらぎ町で何かまとめて取っていた覚えがあるが、県全体データはないんですね。

多分取ってみると衝撃的な結果が出てくるとは思う。

現状、かなり体も硬くなっているとか、基本的なことができない、手首を動かせるかとか、当たり前なのが結構できない子たちが多い。

基本的な筋力とかいろんなところの柔軟性が落ちているっていうのはよく出てくる話。

変な骨折をすとかというのが報告で上がってきている。

ちょっとデータとして持っといた方がいいかなと思う。

一昔前それで、跳び箱飛んで手首を骨折したっていう、それは子どもロコモのこどもだ。

そんな事例があったので、何か変な報告が上がるようになったらちょっと取った方がいいかも。

(川畑委員)

人と関わりのない、1人で実践できるような内容で企画し、授業展開してきた結果が今に至っているのかと。

人と入り乱れてボール運動であればその中で、友達との接触があってそのトラブルを解決するっていう、辺りのそういう力については、経験していない子どもが多いので。

つい先日、2年生の授業を自らがやったが、そのときはやっぱりいろいろ生徒たちが関わりながらさせると、すぐトラブルになっちゃって。

ちょっと離れてしまって拗ねてしまい、対応するのに時間を要し、すごく苦勞したっていう感じはした。

とにかく運動経験が乏しい時を過ごしてきているので、そこを丁寧に授業をしながらやっていく必要があるなということ。

まさにそうなったときに、小学校の体育の授業を専門家的にあるいは研究団体に所属し

て体育の授業の展開が優れている方っていうのが、そんなの2割ぐらいの人しかいない。

その方々以外の方に、いかに子どもたちが楽しめるような体育の授業をするためにはどうしたらいいか、各学校でいろいろ工夫しながら広めていきながらやっていくことで、全体的に運動好きな子が育っていき、結果として体力がまた上がっていくのかな。

(村瀬会長)

社会性の問題まで発言されたが、この先単に、体力が落ちたことだけじゃなく、社会性や人との繋がり、結局これがウェルビーイングに繋がっていくと思うが、その危機でもあるなんていうのが、今の小学校の話であるかと。

ここを何とか改善しないと、本当に社会的な問題になってくるだろう。

見えない社会的な問題というのが生まれて、一つの危険をはらんでいるのかと。

報告事項(4)「全国高等学校総合体育大会及びヨット競技大会について」

資料7により、事務局(窪田 教育支援課長)が説明。

【質疑応答なし】

報告事項(5)「学校(運動)部活動の地域連携・地域移行について」

資料8により、事務局(窪田 教育支援課長)が説明。

【質疑応答等】

(南委員)

和歌山市の協議会に参加しているが、休日というところは、学校の先生が疑問を感じているところだ。

部活動、運動活動以外の先生も入っており、吹奏楽で平日と休日で指導者が違うと1曲を作れないとかっていうようなことがある。

休日にはというのは県の方針という認識か。

(教育支援課 森下指導主事)

国の方針に習って県、さらに、市となっている。

(南委員)

和歌山市としては、各区域で話し合っって競技団体ごとにどういうふうに移行していくかを考えて進んでいるが、それは県の方針じゃないっていうことにはならないのか質問。

競技団体とクラブが一つのテーブルに着いて、この種目はどのように進めていくかというのを種目ごとで決めよう、全部一律に休日だけっていうのは難しいよねっていうところまで話し合いが進んでいる。

4月にその協議会の進め方の会議をやる予定だが、仮に休日も全部移行しますよってなっても、これは県として認められることはないのか。

(教育支援課 森下指導主事)

全くない。

もちろん休日からということだが、平日も含めて段階的に平日もということ考えている。

(南委員)

2月に試案ができて、今ちょうどやろうとしているところだが、国の方針でも、県の方針でも、今回の案内を見ても、休日の活動っていうふうに出たので確認させてもらった。

(村瀬会長)

和歌山市内はある程度、指導者確保できるかなと想像はつくが、他の地域ってなかなか難しくなってくるだろうというのが実情かと。

和歌山市以外で、指導者がどれくらい確保できるのか見通しはあるのか。

(教育支援課 森下指導主事)

指導者の確保については大変大きな課題となっている。

特に東牟婁地方であったりとか、一町一中（一つの町で一つの中学校）の地域があったりもする。

一つの自治体だけでは全ての受け皿を抱え切れないという状況も当然想定される。

まず、一つ一つの30市町村それぞれが自分たちの地域のこどもたちの未来を考えていく中で、その先に広域で取り組んでいくような形の仕組みも作っていかなければいけないということが課題。

全ての町に全ての種目を揃えるということは現実的ではないと考えている。

いろんな各種団体、競技団体や総合型地域スポーツクラブであったり、いろんな方々と連携しながら、チーム和歌山県として考えていく必要がある。

(村瀬会長)

どうしても県内は過疎地域があると思うが、多分スポーツ指導者もほとんど置けないような状況になってくる。

地域によるスポーツ格差、スポーツへの参加の格差ができてしまうという問題があるが、何か考えているか。

(教育支援課 森下指導主事)

今年度いろいろな市町村に回り、協議会等に参加した。

会長がおっしゃるように、過疎の地域で人口減少が進む地域では、こどもの数が少ない、中学生を集めてのスポーツ活動で参加人数がない、というような課題を耳にしたりもした。

協議会関係者との話の中で皆、何も中学生のスポーツは中学生だけで行わなければいけないということではなく、多世代の視点を持って、やりたいという種目をみんなでできるというようなそういう環境作りも必要ではないかという意見も反映していきたい。

(村瀬会長)

そうなると、総合型地域スポーツクラブとの連携が必要になってくるということ。

(坂東委員)

総合型地域スポーツクラブの方に移行していくとかっていう話だが、そうなると、学校の施設とかっていうのはどのように活用されるのか。

(教育支援課 森下指導主事)

施設の利用について検討していくという程度で考えている。

例えば、我々は県教育委員会なので、県立学校等の施設になると思うが、目的外使用での活用方法や、いろいろそういう部活動の地域移行に資する活動、あるいは子どもたちのスポーツ環境の充実に資する活動において、学校施設等をどのように活用していくかということで、今既に制度が出来上がってるわけではないが、検討しなければいけない課題と認識している。

(南委員)

資料の中で、総合型地域スポーツクラブが関わっている事例は何名あるのか。

(教育支援課 森下指導主事)

スライドの2番目 地域スポーツクラブ活動体制整備事業（地域スポーツクラブ活動への移行に向けた実証事業）県内取組市町についてで、かつらぎ町の実証事業では、かつらぎ町の中にある憩楽（いこら）クラブさんから指導者の方を派遣していただくというような、かつらぎ町と憩楽クラブの間で連携している。

(南委員)

一つだけか。

(教育支援課 森下指導主事)

現状はそう。

実証事業においてということ。

4番目 休日の活動における地域移行に着手している市町村立中学校運動部での上富田町では、実証事業とは外れるが、上富田町独自の取り組みとして、Seaca（シイカ）さんとの連携とかでやっているところ。

(南委員)

紀の国アスリートクラブさんもたぶん、総合型地域スポーツクラブではないのか。
ならば三つじゃないのか。

(教育支援課 森下指導主事)

その通り。

(村瀬会長)

多分、有田市のホッケーなんかもその形になりつつあるよね。

(教育支援課 森下指導主事)

今のところ、その総合型地域スポーツクラブの連携ということで把握はしていないが、ホッケー協会の方で聞いているのだが、そういうことがあるかもしれないが、把握出来ていない。

(成瀬委員)

中学校の部活動の指導者というのは資格が必要か。

(教育支援課 森下指導主事)

中学校の部活動を指導するにあたっての資格は特にない。

(成瀬委員)

過去に、自分の出身である西浜中学校の会長をしていたが、僕が学校に通っていた時にあった卓球部が今はない。

今の子に聞くと、卓球がオリンピックで人気になったのでやりたいけどない。

校長先生に聞くと、当然指導者がいないからってことなのだが、夜になると地域のおじさんたちが来て卓球をしている。

そんな方々の中に指導していただくということも、この地域連携になるのではないのか、それはNGなのか。

(教育支援課 森下指導主事)

いいえ、もちろん地域の方に指導者として外部指導者あるいは部活動指導員としての指導者に入っていただくということは地域連携の中に入ると思うが、学校運動部活動を設置するかどうかというのは、校長が学校の業務の割り振りを行う中で設置していくことになる。

まずは、部活動を設置するということが前提にある。

その先に指導者の方、地域の方が来ていただくとかいうことで可能性はあるとは思いますが、指導者の方がいるからすぐに設置しますよということ、校長先生の判断になるかと思う。

(成瀬委員)

指導者の候補として、地域の方でそういうのをやりたいという方も入れていただくことができるということか。

(教育支援課 森下指導主事)

こちらの学校部活動の指導者として使用していただくことも一つですし、その方が地域

クラブの指導者として、地域クラブで子どもたちを指導していただくということもあると思う。

(村瀬会長)

まだまだこれ移行途中かと思いますが、よろしくお願ひしたい。

報告事項(6)「パリ2024オリンピック・パラリンピック本県出場者の結果について」

資料9により、事務局(山本 競技力向上推進班長)が説明。

【質疑応答なし】

報告事項(7)「第78回国民スポーツ大会本県選手団の成績一覧表について」

資料10により、事務局(玉井 生涯スポーツ班長)が説明。

【質疑応答なし】

報告事項(8)「第23回全国障害者スポーツ大会『SAGA2024』和歌山県選手団の競技結果について」

資料11により、事務局(山本 競技力向上推進班長)が説明。

【質疑応答なし】